

ルソー的「円環」の社会構想—理想と現実の相克⁽¹⁾

金 泰明

目次

1. はじめに
2. ルソー的社会状態生成論の特徴
3. ルソー的「円環」の行方—理想社会の実現か、普遍ルール社会の構想か
4. おわりに

1. はじめに

「…人間というものは、見かけによらず、自分で目的を創り出したりはしないんだ。目的は、人間が生まれた時代によって押し付けられるものさ。人間はその目的に奉仕することも、反逆することもできるけれども、いずれにせよ奉仕や反逆の対象は外から与えられたものだ。目的探究の完全な自由を味わうためには、自分一人になる必要がある。でも、そんなこと、成功するわけがない。なぜかというと、人々の間で育てられなかったような人間は、人間になりえないからだ。」(『ソラリス』スタニスワフ・レム)⁽²⁾

「私は自分で、この空虚のなかの暗夜に肉迫するより仕方ない。たとえ身外の青春を尋ねあたらずとも、みずからわが身中の遅暮を奮い立たせねばならぬ。だが暗夜はそもそも、どこにあるのか。今は星はなく、月光なく、笑の渺茫（びようぼう）と愛の乱舞さえない。青年たちは安らかである。そして私の前には、ついに真実の暗夜さえないのだ。

絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい。」（「希望」魯迅⁽³⁾）

人類の夜明け①―キューブリックが映し出した「ヒトザル」⁽⁴⁾

SF映画の不朽の名作「二〇〇一年宇宙の旅」⁽⁵⁾（スタンリー・キューブリック監督）の冒頭は、つぎのような「人類の夜明け」のシーンからはじまる。

―ここはサバンナ。ヒトザルの一群が、イボイノシシの群れとともに大地に茂った草や低木の木の実を食べている。両者は、ときおり食料の草や木の実を巡って小競り合いになるが、流血の事態には至らない。夢中に食べ物を探している一人のヒトザル。突然現れた豹が、背後からヒトザルに飛びかかり食い殺してしまう。／（：場面が変わる）小さな池のほとりにヒトザルの群れがいる。そこに他の群れのヒトザルたちが、水を求めて現れた。水辺のヒトザルたちは吠えながら闖入者を威嚇し追い払い、水場を守った。／：遠くに聞こえる猛獣の唸り声におびえながら、ヒトザルたちが肩を寄せ合って洞窟に身を潜めている。／：目を覚ましたヒトザルの目の前に、彼らの身長

の三倍もある黒い長方形の厚板（モノリス^⑥）が立っている。ヒトザルたちは大騒ぎする。やがてヒトザルたちは恐る恐る石板に手を触れる。／＼一人のヒトザルが、目の前の白骨化した動物の死体の骨をじっと見つめている。やがて、おもむろに死体のなかから一本の太い骨を手に取る。手にした骨を力任せに振り下ろすと、眼下の白骨は粉々に砕け散った。こうしてヒトザルは武器（道具）を手にいれたのだ。／＼ヒトザルたちが骨の棍棒で打ち殺したイボイノシシの肉を頬張っている。もう猛獣たちさえも敵わぬ相手ではない。／＼小さな池をはさんで、ヒトザルの群れ同士が対峙している。一方の群れのヒトザルたちは、それぞれ、骨の棍棒を手にしている。が、こちらの群れのヒトザルたちは、素手のままだ。両者のボスが衝突する。骨の棍棒を手にもつヒトザルたちは、相対する素手のボスのヒトザルに襲いかかり一溜りもなく叩き殺してしまった。雄叫びをあげる勝者は、手にした骨の棍棒を空中高く放り投げる。／＼すると、骨の棍棒は、一直線に大空高く舞い上がり、瞬く間に宇宙空間を漂う宇宙船に姿を変える。——（以上、筆者のまとめ）

私がこの映画を観たのは、かれこれ四十数年前、高校一年生の頃だった。冒頭のヒトザルたちの姿、とりわけ、勝利したヒトザルが空中高く投げ放った骨の棍棒が一瞬にして宇宙船に変化するシーンは、今でも鮮やかに覚えている。この場面は、たいていの映画解説書には「骨から宇宙船までの進歩を一瞬で表現した場面」と説明されている。

しかし、映画評論家の町田智浩によれば、宇宙空間に漂うのは宇宙船ではなく、核ミサイルを搭載した軍事衛星である。キューブリック監督が書いたシナリオでは、大国同士の全面的な核戦争が突入寸前という主旨のナレーションが流れることになっていたという。つまり、ここには「人間は棍棒を核兵器にまで進歩させてしまった」というキューブリックのメッセージが込められている。^⑦

キューブリックが本来描こうとした「人類の夜明け」はヒトザルたち同士の戦争状態にはじまり、以来、現代の人間たちも新しい戦争状態にある。ところで、原作のSF小説『二〇〇一年宇宙の旅』では、「骨から宇宙船までの進歩」、すなわち、知の文明化の歴史として描かれている。そこでの「知」の象徴は、ヒトザルたちの目の前に突然現出した黒い長方形の厚板（モノリス）である。モノリスに触れたヒトザルたちは、やがて道具と言語を手にいれる。原作者アーサー・C・クラークによれば、武器を手にしたヒトザルが、それを使いこなす技術とともに、言語という道具を身につけて「真の人間」になった。人間は時間—過去と未来—を知り、知識をつぎの世代に受け渡し、自然力を制御することを覚えた。⁸⁾ キューブリックの狙いとクラークの意図は異なるとはいえ、戦争の歴史と文明の歴史は同じコインの裏表である。

キューブリックであれクラークであれ、彼らが意図した人類の歴史のイメージは、「直線を描く（進歩史観）。その果てが核戦争であろうと高度の文明社会であろうと、ともかく歴史は終着点に向かって真つすぐ前進する。キューブリックの「二〇〇一年宇宙の旅」では、人類は戦争状態にはじまり、新しい戦争状態（文明化）へと直進する。

「人類の夜明け」②—ルソーの描いた「生まれたばかりの人間」

さて、今見た、キューブリックが映し出した「人類の夜明け」の「ヒトザル」の姿を彷彿させる叙述が、ルソーの『人間不平等起源論』（以下、『起源論』）のなかで見出すことができる。それは、「生まれたばかりの人間」の段階にある「野生の人」の有様だ。『起源論』は大きく純粹自然状態論と社会状態生成論の二部から構成されている。「生まれたばかりの人間」は、第二部の社会状態生成論の冒頭で描かれている。それは、後で述べるように、四段階から成る社会状態生成論の最初の段階に当たる。とまれ、ルソーの叙述を取り出してみよう。

「生まれたばかりの人間の境遇は、このようなものであった。まずは純粋な感覚しかもたず、自然から贈られた才能をほとんど活用できず、自然からなにかを奪い取ろうなどと考えるにはほど遠い動物の生活とは、このようなものであった。しかし、やがて困難が目の前にたち現れ、困難に打ち勝つことを学ばなければならなかった。木が高すぎて果実に手が届かないとか、その果実を食べようとしている他の動物たちと競わなければならぬとか、自分の命を狙っている凶暴な動物たちから身を守らなければならぬといったすべてのことが、人間にとって身体を鍛えるように強いた。木の枝や石といった自然に見つかる武器が、やがて人間の手に握られるようになった。自然が課した障害を乗り越え、必要とあらば他の動物たちと戦い、人間たちの間でさえ食料を争い、自分より強いものに譲らなければならなかったものを埋め合わせることを、人間は学んだのだ⁹。」（『人間不平等起源論』ルソー）

ルソーが描いた「生まれたばかりの人間」の段階にある「野生の人」と、キューブリックが映像化した「人類の夜明け」の「ヒトザル」の様相を比べてみると、両者は、驚くほどよく似ている。しかし、その後の人類史のとらえ方は大きく異なる。

2. ルソー的社会状態生成論の特徴

自然状態から新たな自然状態へ—〈無〉から〈新たな無〉へ

映画「二〇〇一年宇宙の旅」の冒頭では、ヒトザルが空中高く投げ放った骨から宇宙船までの進歩が「一瞬で」表

現されている。人類は戦争状態にはじまり、新しい戦争状態（文明化）へと進み行く（以下、傍線はすべて筆者による）。

さて、しかし、ルソーは自己保存の配慮という「ただ一つの観点」から出発し、自然状態から社会状態への移行を「いくつかの段階に分けて」描写している。ルソー自身は、原初の状態↓生まれたばかりの社会の段階↓専制主義の社会という三つの段階のプロセスとして描写している。この「移行」の段階区分に関しては、識者によって諸説さまざまである。たとえば、エンゲルスは「移行」の歴史を弁証法的にとらえ大きく三段階に分ける。スタロバンスキー（Jean Starobinski）やアルチュセール（Louis althusser）は、それぞれ異なる観点から四段階説を採る。さらに細かく段階を設ける論者も見受けられる。社会発展の段階区分や時代区分は、何を尺度にするかによって解釈が分かれるのである。

私自身は、「何が生まれたのか」という視点からルソーの社会状態生成論全体を注意深く見渡してみた。すると、ルソー自身の「ことば」に即して、つぎの四つの段階に分けることができる。「生まれたばかりの人間」の段階↓「生まれたばかりの社会」の段階↓「生まれたばかりの政府」の段階↓「専制下の不平等の極地」の段階。

第一段階Ⅱ「生まれたばかりの人間」の段階。純粹自然状態（規範の無、関係の無）から最初の社会への前夜の時期。野生の人に「関係の知覚」が生まれ、同胞に共通点を見出す。不完全な言語が生まれる。

第二段階Ⅱ「生まれたばかりの社会」の段階。家族の成立と私有の導入（最初の革命の時代）、言語の成立、余暇（最初の束縛で不幸の最初の源）の楽しみ。発展の中間の位置。世界の真の青年期―人間の能力の発達期、倫理性の導入、もつとも幸福で最良の時期。しかし、協同によつて蓄えができるとすぐに不平等がもたらされ、奴隷状態と悲惨さが芽生える。

第三段階Ⅱ「生まれたばかりの政府」の段階。定住と所有権の確立の時期。貧富の差（不平等）と悪徳の出現、富める者・強者によって「政府」が創られるが、やがて社会は敵対し内乱に陥り無政府状態へと舞い戻る。

第四段階Ⅲ「専制主義下の不平等の極地」の段階。不平等の最後の到達点。専制主義が支配する社会では、支配者の意志以外に善と正義の観念は喪失し、すべての人々が無権利の者として平等である。極端な腐敗の結果としての新たな自然状態（専制下の規範の無）に舞い戻る。

このように、ルソーの社会状態生成論は、人間の誕生↓社会の誕生↓政府の出現↓専制主義の登場へと進み行く。ルソー的社会状態の最後の段階は、専制主義が支配する社会である。そこでは専制者だけが何が正義で善であるかを判断し決めることができるが、しかし、他のすべての人びとは無権利の状態におかれる。こうした専制支配下における人びとの「無権利」状態を、ルソーは「新たな自然」状態と呼んだのである。

「ところが、不平等の最後の到達点であり、円環が閉じて、われわれが出発した点に接する極点であり、ここで、すべての個人が、無であるからふたたび平等になり、臣民には支配者の意志以外にはもう法律がなく、支配者には自分の情念以外の規制がなく、善の観念と正義の原理がふたたび消えてしまうのである。ここで、すべてはもともと強い者の法律のみに、したがって、われわれが出発点とした自然状態とは違った新たな自然状態にまた戻るのである。一方は純粹な形での自然状態であるのに、他方は極端な腐敗の結果である。とはいえ、この二つの状態のあいだにはほとんど相違がなく、政府の契約は専制主義によってはなはだしく破られているので：（中略）…ただ力のみが支え、ただ力のみが倒し、すべてのことはこのように自然の秩序に従って行われ、この短くてしばしば起こる革命が、どんなものであると、だれも他人の不正を嘆くことはできず、ただ自分自身の軽率さかその不幸を嘆

くことができるだけなのである。」⁽¹⁰⁾(中略と傍線は筆者)

自然状態Ⅱ〈無〉から生じたものは、はたして新たな自然状態Ⅱ〈新たな無〉であった。ルソーは『起源論』第一部で「純粹自然状態」で生きる「野生の人」の様子を詳しく想い描いている。一切の規範が無い自然状態で、野生の人は、独りぼっちで暮らしている。野生の人には自我もなく、したがって他者もない。が、野生の人には、「自由な行為者」という性質と「自己を完成する能力」がある。これらの力によって野生の人は、やがて言語を備え駆使させて他の同胞と関係し、文化や社会を創造する可能性をもつ。

孤独に生きる野生の人が、「ほかの人間なしにはすまされない事情のもと」におかれた場合、つまり、相互依存し、てしか生きていられない状況におかれ、相互を求め合った結果たどり着いたのは、専制権力が支配する「不平等の最後の到達点」であった。そこは、すべての個人が無権利状態におかれ、支配者の意志が法律となり、善や正義の観念が消え失せて無(新たな自然状態)となる。一方に純粹な形で自然状態があり、他方の新しい自然状態は極端な腐敗の結果である。とはいえ、新しい自然状態には、権力の独占(専制)と腐敗した政治、身分と財産の不平等、無権利状態におかれた大多数の人びとが存在する。この意味では、新たな自然状態は「無」というよりむしろ「混沌とした有」と呼ぶべきである。

さてしかし、ルソーが追求するのは、「各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由である」⁽¹¹⁾社会である。すべての人々が互いに拘束しあいながら全員が自由であるような社会とは、いうならば「全き有」といえる。

私が思うには、ルソーは『起源論』において、社会状態の必然性、すなわち、「混沌とした有」を描き、『社会契約

論』では、「全き有」としての「新しい社会」にいたる可能性を探り、その条件を求めたのである。人びとは、「混沌とした有」のなかから「全き有」にいたる原理と方法を見出さざるを得ない。「無」から生じるのは「新しい無」、すなわち、「混沌とした有」である。しかし、いずれ必ず、人間は「全き有」にいたる原理と方法を手に行うことができずだ。これが、ルソーの確信である。

『起源論』では、「全き有」＝「新しい社会」に向けた具体的な原理と方途については、ルソーはそれをただ提起するだけであって、具体的に示してはいない。この点についてルソーはつぎのように述べている。「すべての政府の基本的協約についてさらに行うべき探究はいまは立ち入らないで、通説に従って、ここでは政治的な組織の設立を、人民と人民が選んだ首長とのあいだの一つの真の契約とみなすだけにしておこう。」¹²

この課題の解明は、その後の『社会契約論』において詳細に検討されることになる。

〈無〉から〈新たな無〉への「円環」

キユーブリックの「二〇〇一年宇宙の旅」では、人類は戦争状態にはじまり、新しい戦争状態（文明化）へと、真つすぐに進み行く。

しかし、奇妙なことに、ルソーが『起源論』で描いた社会状態生成のプロセスは「直線」ではなく、閉じた「円環」である。一般的に社会の発展や歴史の進み行きは、直線的なイメージでとらえられるものなのに、ルソーは「円環」ととらえる。自然状態（無規範状態）から新しい自然状態（専制下の無権利状態）へと向かうプロセスは、ぐるりと円環を描くという。

「ここが、不平等の最後の到達点であり、円環が閉じて、われわれが出発した点に接する極点であり、ここで、すべての個々人が、無であるからふたたび平等になり、臣民には支配者の意志以外にはもう法律がなく、支配者には自分の情念以外の規制がなく、善の観念と正義の原理がふたたび消えてしまうのである。ここで、すべてはもつとも強い者の法律のみに、したがって、われわれが出発点とした自然状態とは違った新たな自然状態にまた戻るのである。一方は純粹な形での自然状態であるのに、他方は極端な腐敗の結果である。とはいえ、この二つの状態のあいだにはほとんど相違がなく、政府の契約は専制主義によつてはなはだしく破られているので：（中略）…ただ方のみが支え、ただ方のみが倒し、すべてのことはこのように自然の秩序に従つて行われ、この短くてしばしば起る革命が、どんなものであるかと、だれも他人の不正を嘆くことはできず、ただ自分自身の軽率さかその不幸を嘆くことができるだけなのである。」¹³⁾（傍線および中略は筆者）

自然状態（無の状態）を脱して、社会状態は人間の誕生↓社会の誕生↓政府の出現↓専制主義の登場（新しい無）へと「円環」上を変遷する。無（自然状態）から無（新しい自然状態）へとぐるぐると「円環」する歴史。無から新しい無へと進み行く「円環」は、いったい何を意味するのだろうか？

ルソーのイメージする円環する社会状態は、人びとが常識的にもつ単線的な歴史観や進歩史観とは異なるものだ。¹⁴⁾ 歴史は円環上を前進し、決して後戻りはしない。だから「新しい」自然状態という。出発点の自然状態にある野生の人と、社会状態の進み行き極点としての新しい自然状態における社会的人間とは、いずれも「無」の存在であるが、それぞれの「無」の意味内容は異なる。一方の野生の人は、一切の観念と関係の無の存在であるが、他方の極点における社会的人間は、専制下の無権利と不平等の状態におかれた存在である。円環上に出現するのは、「混沌とした有」

としての社会状態である。では、「全き有」＝新しい社会は、どこに在りうるのか？

3. ルソー的「円環」の行方—理想社会の実現か、普遍ルール社会の構想か

はたしてルソー的な円環上には、「全き有」＝真に自由な社会は決して現出しない。ルソーがめざす「各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由である」ような社会は、円環上のどこにも実現しないのである。

そうだとすれば、残された道は二つである。円環の外に飛び出して「全き有」＝真に自由な社会を実現する道を探るか、あるいはそれとも円環の中に留まりながら真に自由な社会の条件を考えつづけるか。円環の外に飛び出る道と、円環の中に踏みとどまり哲学する道を探究すること。これが、われわれが当面取り組むべき課題である。

まず、考察の第一の課題としての円環の外に飛び出る道。それは、ルソー的円環を飛び出して円環の「外」に理想社会を実現する試み、すなわち、革命の道である。ルソーを評価しつつ革命によってルソー的円環を乗り越えようと主張したのが、エンゲルスとマルクスである。

エンゲルスの弁証法的「円環」論—政治的解放の実現

エンゲルスは『反デューリング論』の第一篇「哲学」の「弁証法。否定の否定」において、「ルソーの平等論」を詳しく論評している。エンゲルスは、ルソー的な社会状態の円環論を、「否定の否定」という弁証法的な論法からとらえた。

「ここに不平等の極限がある。円周を閉じ、われわれの出發した起点に抵觸する終局の点がある。ここで、すべての個人が平等になる。というのは、彼らはまさに無であり、臣民は、主君の意志以外にはもはやどんな法律ももたないからである。…(中略)」

こうして、不平等はふたたび平等に転化する。だがそれは、言語を知らない原人の古い自然のままの平等ではなく、社会契約にもとづくより高度の平等である。抑圧者は抑圧される。それは否定の否定である。

ルソーのこの書物には、…マルクスが用いているのと同じ弁証法的論法が、多数みいだされるのである。すなわち、その本性において敵対的で矛盾をふくんでいる過程、一つの極端のその反対物への転化、最後に、全体の核心としての否定の否定がそれである。」(傍点はエンゲルス、中略と傍線は筆者)

エンゲルスの見解では、「円周(＝円環)」上に「社会契約にもとづく高度の平等」社会が実現されるという。ちよつと待った!

ルソーが示した円環上の歴史の極点は、「不平等の最後の到達点」であつたはずだ?

エンゲルスによれば、「原始状態(自然状態)」が必然的に「強奪制度(専制主義)」によつて廃棄される。これが第一の否定である。つぎに、社会契約によつて専制(強奪制度)＝抑圧者は抑圧されて、より高い段階における平等へと進む。これが第二の否定である。このようにエンゲルスは、弁証法の三法則―量から質への転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則―とりわけ否定の否定の法則の観点からルソーの円環としての社会状態全体を見渡し、それをひとつの發展する歴史の過程としてとらえた。

「否定の否定とは何か？それは、自然、歴史および思考のきわめて一般的な、まさにそれゆえにまたきわめて広く作用している重要な発展法則である。」¹⁶⁾

もともと、ルソー的な円環は、自然状態（無としての平等）から新しい自然状態（専制下の無権利状態）へと向かう自然の秩序であった。だが、エンゲルスのとらえたルソー的「円環」は古い自然のままの平等から「強奪制度」（新しい自然状態）を経て、「社会契約にもとづく高度の平等」社会が実現される歴史過程である。ルソー的円環の歴史の極点は、「不平等の最後の到達点」であるはずなのに、エンゲルスは「高度の平等」社会であるという。これは、いったいどういうことなのだろうか。

たしかに「円環」上に、戦争状態を脱するためにある種の「契約」によって国家（政府）が現れる。しかし、生み出されたのは服従契約国家である。これをスタロバンスキーは偽りの社会契約といい、ルソーの求める社会契約による真に自由な社会ではないと断じる。

にもかかわらず、エンゲルスはルソー的社会契約による自由で平等な社会が円環上に実現されるとみなしている。エンゲルスのこうした議論は、たしかにルソー的円環から逸脱したものであるが、とはいえしかし、そこにはエンゲルスの重要な意図が込められている。

エンゲルスは、市民社会Ⅱ資本主義社会における「より高度の平等」の意味を反転させ、その内実は「隷属化」であると断じる。それをつぎのように、AとBの二人の男の関係をたとえにして説明する（以下は、エンゲルスの『デューリング論』第一篇「哲学」の第一〇章「道徳と法、平等」からのまとめ）。

— ルソーは『人間不平等起源論』で二人の男をつかつてつぎのように証明している。

「二人のうちAがBを隷属化できるのは、暴力によってではなく、もっぱらBを、Aがいなければやってゆけないような状態におくことによつてである。」ルソーはこのようにいうが、われわれは、この同じ問題をすこし違った仕方できりあげてみよう。

いま、船が難破してAとBの二人の男がある島にたどり着いて暮らすようになった。

「彼らの意志は形式上は完全に平等であり、このことは二人とも認めている。しかし、実質上は不平等がある。… (中略) …自由意志の形式がたまたれようが、それが踏みにじられようが、隷属は隷属である。」⁽¹⁷⁾ (中略は筆者)

たしかに社会契約によつて「より高度の平等」が実現される。しかし、「より高度の平等」の内実は「形式上の平等」にすぎない。それは、実質的には不平等である。また「自由」でさえも、身分的な束縛からの自由と、自分の身体以外に労働手段をもたない自由を意味するにすぎない。⁽¹⁸⁾ たしかに、ルソーのいう社会契約によつて人びとに自由と平等がもたらされる。だが、実際に生み出されるのは、自分の身体以外に生きるための術をもたない「自由」な人間であり、また人格（自由意志）という名ばかりの形式的平等がもたらされるのであつて内実は不平等のままである。—

同じようにマルクスもまた、自由意志の「形式上の平等」の実現を「政治的に解放」された人間の姿とみなし、ルソーの『社会契約論』の一節に言及しながら、つぎのように述べている。

「政治的人間の抽象化をルソーは次のように正しく描きだしている。…（中略）政治的解放は人間を、一方では市民社会の成員、利己的な独立した個人へ、他方では、公民、精神的人格へと還元することである。」⁽¹⁹⁾（中略は筆者）

エンゲルスやマルクスにとつて、ルソー的円環上に見出されるのは、政治的解放の実現である。政治的解放とは、形式的平等の獲得にすぎず実質的には不平等であるがゆえに、人間的解放にはほど遠いものである。政治的解放と人間的解放とを混同するな、とマルクスは警鐘を鳴らす。ルソー的な社会契約によつて獲得するのは、形式的平等＝政治的権利である。円環の歴史上に実現されるのは、あくまで「半分の有」＝政治的権利にすぎない。「全き有」は、円環上に決して実現しないのである。「全き有」、すなわち、人間的解放が実現された社会は、革命の実践によつてしかもたらされない。これが、エンゲルスとマルクスの示した観点であり方向性である。

革命による「円環」からの脱出—人間的解放と理想社会の実現

エンゲルスの見方では、ルソーの円環の上に実現されるのは政治的解放（「半分の有」）にすぎない。すべての人びとの人間的解放（「全き有」）は、円環の「外」で実現される。とはいえ、しかし、それは自然なプロセスではなく、人々の意識的な実践、つまり「革命」によつてしか実現されえない。この革命を中心に担うのが、プロレタリアート（労働者階級）である。これに関してエンゲルスはつぎのように述べる。

「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国家的所有に転化する。だが、そうすることで、プロレタリアートは、プロレタリアートとしての自分自身を揚棄し、そうすることであらゆる階級区別と階級

対立を揚棄し、そうすることでまた国家としての国家をも揚棄する。∴（中略）∴国家は『廃止される』のではない。それは死滅するのである。」（傍点はエンゲルス、中略は筆者）

国家は「揚棄」された後、「死滅」する。はじめに、プロレタリアート革命によって国家（ブルジョア国家）が「揚棄」され、つづいてプロレタリアートの国家が「死滅」する。エンゲルスがいうには、国家は二段階の否定を経て消滅する。

エンゲルスやマルクスらが描く人間の歴史発展のプロセスは、原始的共産制からいくつかの段階を経て資本主義へ至り、さらに社会主義、共産主義社会へと発展する。注目すべきは、原始共産制から資本主義社会までを歴史発展の自然的過程とし、その後の社会主義・共産主義社会への移行を革命、すなわち、「意志の自由」をもつ人間の実践の飛躍の試みとみなしていることである。革命は、階級闘争である。新しい社会の主人（プロレタリアート）が、敵対する旧社会の支配者（ブルジョアジー）を打倒することによって、革命は成就する（プロレタリア革命）。プロレタリア革命によって階級対立が揚棄され、搾取や疎外のない社会がもたらされる。抑圧すべき階級（ブルジョアジー）が消滅すると、敵対階級を抑圧する暴力装置である国家そのものの存在理由がなくなり、最終的には国家も死滅する。こうして、すべての人間が自由で平等な社会、いいかえれば、人間的解放が実現した「全き有」の社会を実現することができる。

スタロバンスキーによるエンゲルス批判―革命的手段ではなく、病の治療薬への転換

これまで紹介したエンゲルスのルソー的円環からの飛躍、いいかえれば革命による人間的解放と理想社会の実現と

いう構想について、スタロバンスキーは「従うべきひとつの方向性をさし示している」といいつつ、そうした道筋を批判し否定する。「革命による止揚」と題した一節において、スタロバンスキーはエンゲルスに対してつぎのような批判を展開している。²¹

まずは、『人間不平等起源論』について。歴史の極限に到来する革命的な状況（専制下の不平等の極限）は、決定的な変化（革命）によってあらたな正義を復興するものではない。「ルソーは、希望に道を開けていないし、いかにして人間はかれらの運命を克服し、市民の自由における平等を獲得しうるのであるかを語っていない。」ルソーが期待するのは「恒常的な無政府状態」であるという。

つぎに、『社会契約論』について。スタロバンスキーによれば、ルソーは革命的手段によって自由が獲得されるべきだと断定しておらず、「すでにある社会から完全に公正な社会への移行についての実践的な問題を避けている」という。ルソーの社会思想は、「われわれを一般意志と正当な法の支配を根拠づける決定に近づける。この決定は端緒としての性格はあっても、革命的な特質はもっていない」のである。社会契約が意味するのは、「政治的理想の実現の条件を問いかけることなしに、始まりから、すなわち、虚無から *ex nihilo* 再出発することである。」

では、「全き有」に向けて、ルソーの構想が「革命」という回路を否定しているとすれば、どのような筋道がありうるのだろうか。スタロバンスキーの主張は、一言でいえば、「病を治療薬へと転換すること、悪徳と紛争の原因を『徳』へと変えること」でもある。

専制政府の病は、ルソーが想定した最悪の状態といえるが、そうした最悪の状態には唯一の利点があるとスタロバンスキーはいう。その利点とは「変わるとすれば、良いほうへしか変わりえない」ということだ。あらゆる専制は、「おのれの悪徳に対する治療の手段を、おのれのうちに潜在させている」のである。²² これは、ちょうどルソーが「悪そ

のもののうちから、悪を癒すべき手段を探してみよう」と語ったのと同じ発想である。⁽²³⁾だがしかし、スタロパンスキのいい方は文学的に過ぎてやや明瞭さに欠ける。

私が思うには、ルソーの社会構想の直観は、端的にいえは「普遍ルール社会」⁽²⁴⁾をめざすものである。これについて、つぎに私の考えを述べよう。

ルソー的「円環」論―社会契約による普遍ルール社会へ

考察の第二の課題は、円環の中に留まりながら「全き有」⁽²⁵⁾に真に自由な社会に向けた原理と手立てを探究することだ。「円環の中に留まる」とは、「いま、ここ」を生きることだ。

ルソーは『起源論』第一部の冒頭で「人間について」語ろうといい、一切の観念の無（純粹自然状態）の中にいながら自由の可能性をもつ存在（野生の人）を手がかりに、社会生成の条件を問うた。第二部の最初では、「ただ一つの観点」、すなわち、生きること＝自己保存の配慮から出発して、自然状態から社会へと変化する過程と条件を考察しようという。⁽²⁶⁾無（純粹自然状態）のなかで欲求のまま自由に生きる人（野生の人）から出発して考察すること。この観点は、『ジュネーブ草稿』や『社会契約論』においても変わらずに引き継がれている。欲求の力が人をして互いに求めあわせ、情念の力が人間同士を対立させ戦わせる（『ジュネーブ草稿』⁽²⁶⁾）。また、権利や平等、正義といった諸々の観念は人が自分のことを先にするということ（＝人間の本性）から出てくる（『社会契約論』⁽²⁷⁾）。

人間の欲求や欲望をありのままに認め生きること。自己愛（＝自然の感情）を失わずに生きられること。自己中心性から出発すること。すべての人間がこのように自由に生きるならば、（私）の欲望と他者の欲望との対立や衝突は避けられない。そのとき誰もが自己の生命と自由を守ろうとする。たとえ殺し合いになろうとも自己を守る権利がある。

しかし、結局、互いに「生きる」ためには殺し合いをやめ、ともに生きていけるような条件と可能性を探しだすしかない。それは、互いに約束を交わして、権利や正義、平和といった諸々の観念、したがって規範＝ルールをつくり出すことだ。

円環の中に踏みとどまりながら、「生きる」ことをあきらめずに、すべての人間が互いに「生きる」ことを認めあう道は、畢竟、すべての人びとによる約束にもとづく「普遍ルール社会」に行きつくほかない。

ここでまちがってならないことは、普遍ルール社会とは「全き有」が実現した社会を意味するのではない。そうではなく、普遍ルール社会とは「全き有」の実現に向けた理念・原理・手立てが一般的・普遍的に承認された社会をいう。

ルソー的円環には、現実の歴史のはじまりも終わりもない。ルソーが円環上に描いた社会状態の四つの段階のいずれも、はじまりでも終わりでもない。いかなる社会状態もいつかは腐敗し終末を迎える。純粹自然状態は現実の始発点ではないし、新しい社会（全き有）も理想の終着点でもない。がしかし、悪がはびこり不平等で腐敗の極地に達した社会状態から、また再び新しい社会をめざして歩き「はじめる」ことができる。意志の自由をもつ人間は、新たな約束を交わして新しい政治体をめがけることができるからだ。この意味では、「始まりから、すなわち、虚無から *ex nihilo* 再出発することである」というスタロバンスキーのことばは、確かに的を射ている。それは、破滅から不死鳥のように再び立ち上がることだ。「腐敗と墮落が蔓延し、無秩序と混沌のうちへと落ち込んでしまった地点に、はじめりの約束、社会契約が位置付けられる」のである。⁽²⁸⁾

ルソーは『起源論』で人類の決して避けることのできない「破滅」を描きつつ、『社会契約論』において破滅の後にやってくる新しい政治体について構想を練り上げた。ルソー的な円環する社会状態において、人びとは「破滅」のな

かから新たな社会を創造しようとする「はじまりの約束」を結ぶことによって、いつでもどこからでも「全き有」に向けてリ・スタートできる。ルソーが『起源論』で示そうとしたのは、人間がもつ「はじまりの約束」にもとづく新しい社会の創造のための原理と手立てが求められる、その必然性である。新しい社会秩序は、まったく新しい原理の下、新しい手続きⅡ社会契約によってもたらされるのである。それが、「普遍ルール社会」である。

4. おわりに

ルソー的円環の外に飛び出すことは、「いま、ここ」の生を否定して、彼方に理想社会を求めることだ。エンゲルスとマルクスは、ルソー的円環の「外」に飛び出して理想としての「新しい社会」を革命によって実現しようという。政治的解放に飽き足らず人間的解放に向かうこと、それは一切の搾取や抑圧がなくなり、すべての人間が自由で平等に暮らす理想社会である。実際、二〇世紀はこうした信念と理想を掲げるロシア革命で幕開き、以降、七〇数年の間、社会主義は世界中を席卷し、大きな爪痕を残して、結局「失敗」に帰した。

社会主義・共産主義社会であれ、神の国であれ、あるいはカント的な「目的の国」であれ、そうした人間解放の理想Ⅱ「全き有」を実現する企ては、「大きな物語」にならざるをえない。それは、理想の実現のために、克服すべき「敵」を見出そうとする。人びとに、自己の内と外に「敵」を探し出し、それに打ち克つべしと要請する。悪に惑わされず善なる心を保ち、理性によって感性を乗り越え、被抑圧者は支配者を打倒せよ。ここでは「敵」への暴力は、「義」によって正当化される。こうした信念は、悪に目を閉ざし、悪を殺して、善なる人間から成る善なる社会へと向かう「大きな物語」である。

さてしかし、ルソー的円環の「中」に留まることは、人間として自己を「生きる」ことから出発し、誰もが欲望のまま自由に「生きる」社会の可能性を追求することだ。それは、エンゲルスやマルクスのように理想社会の実現という希望（革命の道＝大きな物語）を語らないし、自己の主義信条・理想と異なる「敵」を探しだそうともしない。ここでは相違はもつばら自由な議論を通して克服され、対立する諸信念に対しては対話による相互承認が求められ、共通了解をめざす。スタロバンスキーが明言したように、ルソーは希望をめざさないし革命にも訴えない。円環の中に留まって「生きる」ことは、ただ「病のなかに病を癒す」力を見つけ、「悪のなから悪を正す」可能性を探しだし、暗闇のなかに光を見出そうすることだ。絶望のなから「それ以外ない道」を探しだして歩むことだ。

もう一度確認しておこう。普遍ルール社会とは、すべての人々の人間的解放が実現された社会（「全き有」の達成）ではない。それは、誰もが「全き有」に向けた原理や方法を手にして、それに向かって努力できる社会を意味する（「全き有」の条件の普遍的承認）。『起源論』が明らかにしたのは、円環する社会状態の途上において、人間はいつでもどこからでもまた再び「全き有」をめがけて再出発できることだ。

しかし、『起源論』では、まだ「全き有」に向けた理念・原理・方法は、具体的にほとんど何ひとつ論じられていない。『起源論』は、悪のなかを「生きる」人々を描き、悪のなからしかすすべての人間が互いの欲望と自由を認めあう道は見えてこないこと、したがって、すべての人びとによる約束にもとづく「普遍ルール社会」に行きつくほかないことを示しただけである。この課題の解明は、その後の『社会契約論』と『エミール』においてなされる。よって、われわれはもつと先に進まねばならない。「全き有」の社会の構想に向けた哲学的思索の歩みは、尽きることのない道程である。そもそも、円環にははじまりも終わりもないのだから。

- (1) 本稿は、Web学術誌『本質学研究』第四号(早稲田大学竹田青嗣研究室主監、二〇一七年五月)に掲載された拙稿「ルソー的「円環」の行方―理想社会の実現か、普遍ルール社会の構想か」に、若干の補筆、修正を加え論考にまとめたものである。
- (2) 『ソラリス』スタニスワフ・レム、沼野充義訳、図書刊行会、二〇〇四年、三三四頁
- (3) 『希望』、『魯迅選集 第一巻』魯迅、竹内好訳、岩波書店、一九五六年、「野草」の章所収、一九四頁
- (4) SF小説『二〇〇一年宇宙の旅』(アーサー・C・クラーク/伊藤典夫訳、早川書房、一九八〇年)では、第一部「最初の夜」とされている。そこではヒトザル(サルとヒトの間)が、百万年後に「最初の真の人間」になる様子が描かれている。(同書、十五頁―四十五頁)。
- (5) 映画『二〇〇一年宇宙の旅』スタンリー・キューブリック監督、一九六八年公開、原題『2001: A Space Odyssey』、原作はアーサー・C・クラークの『二〇〇一年宇宙の旅』。
- (6) クラークの小説『二〇〇一年宇宙の旅』では、モノリス(Monolith)は、長方形の厚板で完全に透明な物質でできた物体である。地球外知的生命の道具を暗示している。モノリスに触れたヒトザルたちがやがて石や骨という「道具」を手にいれ、言語を身につける。
- (7) 「これは本当は『宇宙船』ではありません。核ミサイルで敵国を狙う軍事衛星なのです。スタンリー・キューブリック監督が書いたシナリオでは『大同同士が核ミサイルを突きつけ合って、全面戦争勃発寸前』という主旨のナレーションが流れることになっていました。つまり、『人間は棍棒を核兵器にまで進歩させてしまった』という不気味な場面なのです。」(『映画の見方』がわかる本) 町田智浩著、洋泉社、二〇〇二年、三頁)
- (8) 同右書、アーサー・C・クラーク、四十四頁―四十五頁
- (9) 『人間不平等起源論 付「戦争法原理」』ルソー著、坂倉裕治訳、講談社学術文庫、二〇一六年、九十六頁―九十七頁
- (10) 『人間不平等起源論』ルソー、原好男訳、白水社、一九八六年、八十九頁
- (11) 『社会契約論』ルソー、桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、一九九六年、二十九頁
- (12) 同右書、ルソー、一九八六年、八十六頁
- (13) 『人間不平等起源論』ルソー、原好男訳、白水社、一九八六年、九十三頁―九十四頁

- (14) 竹田青嗣は、近代の伝統的世界観としてつぎの三つを指摘している。「第一。世界は神によって想像された、したがって世界はその進み行きのうちにある〈目的〉を持っているという世界観（キリスト的）。第二。世界は神によって作られたかどうかは言えないが、たとえばそれが生命の〈進化〉を促すように、次第に〈進歩〉し〈発展〉するものであるにちがいないという世界観（ヘーゲル的）。第三。世界ははじめの起点を何らかのかたちで持つが、その後はそれ自身の法則つまりただ機械的因果によってのみ動いているという世界観（唯物論的）」（『ニーチェ入門』竹田青嗣著、ちくま新書、一九九四年、一五四頁—一五五頁）
- (15) 『反デューリング論一』フリードリヒ・エンゲルス、村田陽一訳、国民文庫、大月書店、一九八二年、二二六頁—二二七頁
- (16) フリードリヒ・エンゲルス、同右書、一九八二年、二二八頁
- (17) フリードリヒ・エンゲルス、同右書、一九八二年、一五二頁
- (18) 「契約当事者として平等な権利をもって工場主と相対するある数の自由な労働者—一方では、ツンフトの束縛から自由な、また他方では、自分の労働力を自分で利用するための手段から自由な「手段をもたない、の意」—が存在していることが前提とされる。そして、最後に、あらゆる人間労働は、人間労働一般であるがゆえに、またそうであるかぎり平等であり、平等な資格を持っている」（エンゲルス、同右書、一九八二年、一六二頁）
- (19) 「ユダヤ人問題によせて」カール・マルクス、『ユダヤ人問題によせて／ヘーゲル法哲学批判序説』（城塚登訳、岩波文庫、二〇〇八年）所収、五十二頁—五十三頁
- (20) 『反デューリング論二』フリードリヒ・エンゲルス、村田陽一訳、国民文庫、大月書店、一九八二年、五〇一頁—五〇二頁
- (21) 『ルソー／透明と障害』J・スタロバンスキー、山路昭訳、みすず書房、一九七三年、四十七頁—五〇頁
- (22) 『病のうちなる治療薬』ジャン・スタロバンスキー、小池健男／川那部保明訳、法政大学出版局、一九九三年、一九六頁—二〇六頁
- (23) 「人類のうちには自然な一般社会は存在しないと考えよう。人間は社会的になることで不幸になり、邪悪になったのだと

考えよう。…(中略)…悪そのものうちから、悪を癒すべき手段を探してみよう。できれば新しい結びつきによって、一般的な結びつきの欠陥を是正しよう」(省略は筆者、「ジュネーブ草稿」、中山元訳、光文社、二〇〇八年、『社会契約論/ジュネーブ草稿』所収、三二〇頁)

(24)

「普遍ルール社会」は、竹田青嗣が名づけた概念である。竹田は、「近代社会」の根本構想を「純粹ルールゲーム」の概念で呼ぶ。つまり、「近代(市民)社会」の核心理念は、社会から「暴力原理」を完全に排除し、これを純粹なルールゲームに変える試みであるという(竹田青嗣著『人間の未来』ちくま書房、二〇〇九年、一三二頁—一三三頁)。

(25)

「人間の最初の感情は自己生存の感情であり、最初の配慮は自己保存の配慮であった。」(前掲書、ルソー、一九八六年、六十二頁)

(26)

「わたしたちは欲求の力でたがいに接近するが、情念の力でたがいに対立する。…人間の本性が同じであることが、人々を結びつけると同時に戦わせるのであり、人々に和解と和合をもたらすと同時に、競争と嫉妬をもたらすからである。」(省略は筆者、「ジュネーブ草稿」、中山元訳、光文社、二〇〇八年、『社会契約論/ジュネーブ草稿』所収、三〇六頁—三〇七頁)。

(27)

「権利の平等、およびこれから生ずる正義の観念は、それぞれの人が自分のことを先にすることから、したがってまた人間の本性から出てくる。」(『社会契約論』桑原武夫・前川貞次郎訳、岩波文庫、一九五四年、五〇頁)

(28)

『社会契約論』重田園江、ちくま新書、筑摩書房、二〇一三年、一六七頁